この道ひとすじ（90）

「海が先生」

内なる自分を見つめ――

青木ヨット工房
青木　洋さん

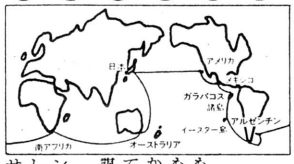
――全長二十一フィート（約六・五㍍）、自作のヨット「AHODORI」とともに、たった一人で世界一周に乗り出した青木洋（当時二十二歳）――

十三年前、南アフリカ最南端、喜望のホーン岬を日本人として初めて回り、三年二カ月の世界一周を果たした青木さん。生きることの意味を問いただそうと旅に出た彼が見つけたものは？そして、その後の生きざまは？

現在、泉大津と住之江にヨット工房を構える彼は、大阪中の川にカヌーをいっぱい浮かべたい、と語った。

泉大津にある青木ヨット工房にて

自作のヨットで世界一周



「何のためにこんなに勉強して大学へ行くのだろう」

「自分は何のために生きているのだろう」

思春期に誰もがもつ疑問である。しかし大抵の場合、その疑問は年齢が増すとともに反比例していく。が、たとえ社会的な日常の安定を犠牲にせねばならぬ不安があったとしても、自分の内なる疑問を見つめその回答を得ようとする生きざまもある。

京大農学部を目指し、受験勉強真只中にいた青木さんの中にも、その疑問は病みがたく膨らんでいた。

高三の夏休みのある日、近くの海岸で友人のヨットが走っているのを見た彼は、突然、「そうだ、設計図を買い求め、一本を片手に木を削り、自宅の庭で二十一フィートのクルーザー（キャビン付き大型ヨット）を作り出した。

材料費五十万円、アルバイトをしながらの二年間。当時を振り返り「ただ旅に出る日を夢見て作っていました。楽しかったですね」と言う。

毎日毎日ヨットに乗っているうちに、もっと遠くへ行きたいと世界一周を考えるようになり、受験勉強をやめ、ヨットを作り始めた。

半年後の卒業間際、十三フィート（約四㍍）のディンギー（小型ヨット）が完成する。

二十二歳の春、いよいよ進水式。友人を呼び集め、へいをつぶし、台に乗せ、一升先の海まで押していく。

――海に浮かべた時の感激は？

「はい、ありました。水がもれへんかってよかったなあと思いました。」

青木さんがクルーザーに乗るのはこれが初めて。ディンギーもクルーザーも誰にも教わらず独学で覚えていった。世界一周の行程さえも、誰の意見も聞かず資料を集め、風向きを調べ、一人で決めた。

「海が先生でした。」

生きる意義を問おうと旅立つ

AHODORIにはエンジンも無線も付いていない。風が来ても逃げれないし、他のハム仲間から気圧配置も聞けない。まして、SOS発信できない。無謀では？という問いに、

「昔の大きな帆船だってエンジンはついてませんでしたし、ディンギーにもついていませんし、エンジンはあれば便利ですが、必ず要るというものではありません。

なるべく原始的な生活をしたかったからつけませんでした。

自分が勝手に旅に出るのですから、もし何かあっても無線で救援を頼み他の人に迷惑をかけず、死ぬ時は一人で死のうと思っていましたから」と言う。

一年後の六月十三日、堺の石津港から世界一周に旅立つ。

八十日間の太平洋横断後、最初の寄港地サンフランシスコへ。メキシコ、ガラパゴス諸島、イースター島に寄り、ホーン岬を回りアルゼンチンへ。その後、南アフリカ、オーストラリアを経て、三年二カ月後日本へ戻って来た。

さまざまな体験を通し、青木さんは何を見、何に触れ、何を考えたのだろう。

「長い洋上生活を続けていると、自分が自然界の一匹の動物にすぎないと思うようになりました。

例えば、土地の違いも良いで判るようになります。メキシコは麦わらの臭い、オーストラリアは森のたき火…という風に。

潮の干満、風の方向も肌で感じます。

人間が本来持っている資質には素晴らしいものがあるようです。最初は知らない人や土地、文化に触れたり、日本人で初めてホーン岬にチャレンジするとなんだろうと考えました。」

――一人で旅をしていて孤独感は？

「全くありませんでした。

言葉を発することはなくても月とか空とかと直感的にコミュニケートできましたから。人間も未来そういうものを持ってはずなんですが……

航海をはじめて目数がたつにつれ、心が満たされ、穏やかになっていきました。」

嵐にあい数日間もキャビンに閉じこめられたり、波の障壁、頭上から打ちつける大波、船が完沈してあわやという場面もあったと言う。「早くすませて欲しいな」と思っていたそうだが、「極限状態が続くなかで、そう穏やかでもいられないと思うが」という疑問に、彼が答えて語ってくれた夢は……。

航海を始めた頃、しばしばヨットから落ち、気がついたら暗黒の海の中でもがいている、という夢。

そして、航海半ばから何度も見だした夢は、自分が棺の中に入って燃やされているのを別の自分が見て笑っているものだったと言う。

「ある一人の自分がそこで死んだということだったと思います。

自分の中にどうしようもなく大きくなったいろいろな疑問の回答を得るために海に出たのですが、最初は知らない人や土地、文化に触れたり、日本人で初めてホーン岬にチャレンジするとなんだろうと考えました。」

あるがままの人生を

望郷の念、旅が終わるさみしさ、また新たな旅立ちへの決意、さまざまな思いを含んで帰ってきた日本であるが、その後の四・五年間を『破壊の時』と言われた。

自分自身を、そして、両親、仲の良かった友人、恋人……すべての関係をつぶしていった時であった。

航海であまりにも自分をみつめ確立したため、すべてのものがもう矛盾を受け入れられなくなったのだろうか？あまりにも自然で穏やかな日々を過ごしたため反動のエネルギーが出たのだろうか？

「どうしたらいいかわからなくなったら、いつも旅に出る」という青木さんは、出来あがったY－15で屋久島へ旅に出た。

「もういつ死んでもいいな、と思いながら航海であったがありのままで素晴らしいと思うよいうことも聞きを占めていました。そういう功名心に燃えていた自分が、死んでいったんだと思います。

航海を続けていると、神様のような自分と、悪魔のような自分、さまざまな自分を感じました。旅を終えても疑問は解決されることなく、増える一方でした。」

あるがままの人生を

だろうか？

理由は判らないという。

仕事面では二年後、広島のヨット会社に就職、六年間勤める。その間殆んどヨットに乗らない生活が続く。

このままではいけないという危機感とともに大阪へ戻り、再びヨットを作り出した。

「どうしたらいいかわからなくなったら、いつも旅に出る」という青木さんは、出来あがったY－15で屋久島へ旅に出た。

「もういつ死んでもいいな、と思いながら航海であったがありのままで素晴らしいと思うよ

生活にしても、イースター島にいたころは、これこそが自分の求めていた生活、理想に近い生活だと思っていたわけですが、今は、都会のこの生活もまた、本物だと思うようになりました。

酸いものの中にも、たくましさ、美しさがあると。すべてをありのままで素晴らしいと思うようになりました。」

――これからの生き方は？

「見えてきた自分に従って生きていこうと思っています。

仕事面ではカヌーを作りかけています。大抵に。

ヨットというとどっきにくいかも知れませんが、カヌーなら自転車に乗るような身近なもので、中之島や汚ない都会の川にいっぱい浮かべて、皆が今ジョギングしたりしているかわりに、会社帰りに気軽にカヌーに乗って酒を飲む、親子で楽しんで乗る、そういう提案をしたいと思っています。

その前に河川汚染防止の運動をしないのかという人もいるでしょうが、僕はそうやってカヌーを広めて、多くの人が身近に海や川を感じたら、自然も戻ってくると考えています。」

あと五年ぐらいはそのためにエネルギーを使って行きたいと語ってくれた青木さんに、その後はと尋ねると

「どっか旅に出るかも知れませんね」と、ニヤッと笑っていわれてしまった。